

Title	プラトンに於ける魂の不滅：殊にパイドン篇を中心として
Sub Title	
Author	星野, 重顯
Publisher	三田哲學會
Publication year	1936
Jtitle	哲學 No.15 (1936. 3) ,p.99- 133
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000015-0099

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

プラトんに於ける魂の不滅

(殊にバイドン篇を中心として)

星野重顯

目次

- (一) 魂の先在證明
 - (a) Physischer Beweis. 一(一)(三)(四)(五)(六)
 - (b) 此の證明のフホリヤ。 一(一)(三)(四)(五)(六)
 - (c) Psychologischer Beweis. 一(一)(三)(四)
 - (d) 此の證明のフホリヤ。 一(一)(三)(四)
- (二) 魂の存続證明
 - (a) Ontologischer Beweis. 一(一)(三)(四)(五)(六)(七)
 - (b) 此の證明のフホリヤ。 一(一)(三)(四)(五)(六)(七)
 - (c) Dialektischer oder Epistematischer Beweis. (Beweis aus dem Begriff der Seele)
 - (d) 此の證明のフホリヤ。 一
 - (c) Beweis.
 - (d) この證明のフホリヤ。
- (三) 論結

プラトんに於ける魂の不滅

(一) 魂の先在證明

(a) *Physischer Beweis*

此の證明は經驗からもち出されてゐる。凡て生じたるものは、その反對のものから生じたので、大は小から、小は大から、強きものは弱きものから、緩なるものは速かなるものから、悪しきものは善きものから、正しきものは不正なるものから成るのである。²⁾ 生成は常に或る定つた媒介物に依つてなるものであるが、特別な場合には附加する媒介物に依つてもなされる。³⁾ 小なるものは大なるものから引き去る事に依つて、大なるものは小なるものから附加する事に依つて生じる。眠りは目覺に對立する様に、死んでゐる事は生きてゐる事に對立してゐる。⁴⁾ 此等は對立反對してゐるからして、その反對からして互に生ずべき筈である。⁵⁾ 従つて此れには二様の生成がある。⁶⁾ 例をやすきにとれば、眠りから目覺が生じる。此の場合の生成は目覺める事である。⁷⁾ 目覺から眠が生ずるが此の場合の生成は眠る事である。さて、生きてゐる事と死んでゐる事とは互に對立してゐる、されば此等は互に

對立反對してゐるものから生じる。⁸⁾ 生きてゐるものから死んでゐるものが生じるのは一見明である。⁹⁾ 而して生きてゐるものは死んでゐるものに對立してゐるんだから、死んでゐるものから生きてゐるものが又生成しなければならぬ筈である。¹⁰⁾ 死んでゐる事への媒介物は死であり、生への媒介物は甦る事である。¹¹⁾ 生きてゐるものから死せるものが生ずる過程は吾々は一般の經驗事實として主張しなければならぬ。同様に死せるものから生きてゐるものが生ずる事も又可能であるべき筈である。¹²⁾ 凡てのものは圓周を廻る様なものであつて、もしそうでないときには凡てのものが同一カテゴリーに同化して了つて、凡てのものはその反對のカテゴリーを失つて了ふに至る。¹³⁾ 同様に生きてゐるものから死せるもののみが生じて、死せるものから、之に反して、生きてゐるものが生じないとすれば、死は凡ての生きたるものを奪ひとつて了ふであらう。¹⁴⁾ 然るに魂は甦る事によつて再び生をとりもどすのであるから、魂は必然的に以前、何物かであり、又どこかにあらねばならぬ。¹⁵⁾

1) Phaed. 70 C. 2) ibid. 71 以下 3) ibid. 71 A. 4) ibid. 71 C. 5) ibid. 71 C. Menon. 81 B. 6) Phaed. 71 A. C.

- 7) *ibid.* 71 D. 8) *ibid.* 71 D. Menon 81 B. 9) *Phaed.* 71 D. 10) *ibid.* 71 D. 77 D. 11) *ibid.* 71 E.
 12) *ibid.* 71 E. 13) *ibid.* 72 A. C. 14) *ibid.* 72 D. Gesetz 904 A. Staatsmann. 270 D. 以下
 15) *Phaed.* 70 D. 71 A. 72 E.

(b) 此の證明のアポリヤ

(一) 此の論斷には幾多の困却アポリヤが伴つてゐる。先づ第一にその一般命題に關したものである。對立してゐるものは他のその反對のものから生成の特殊過程に依つて生ずるとの此の意味を此處で論理的なものであり得ると誤解してはならぬ。プラトンは此の生成の始點と終點とに關する吾々の考へを比較して、二つの對立したものを見出し、尙生成への必然的な中間概念を此につけ加へてゐる。此の中間概念によつて一つの概念が他の概念へ遷り行くのである。之に反して一般に何物かゞ生じ、又二つの對立したもの(生と死)の中間過程が實際に生じ得るものである、と言つた様なことが實際に可能であるかどうかの形而上學的なアポリヤは明にされてゐない。吾々は此の命題を只假設的にのみ考へ得る、即ち、或物が生ずる場合には、此の生ずるものは、以前に此の或るものでなかつたものから生ずると。

(二) 此の命題を實際にあてはめて見るに、同一の本質 A の m の状態は以前になか
つた *Forme* の状態から生ずる。生きてゐない状態は、それが生ずべきときには生き
てゐる状態から、又生きてゐる状態に生きてゐない状態から生じなければならぬ
事は吾々は認める事は出来るが、然し此の場合それは問題ではない。吾々はどの
状態から生きてゐるもの、又生きてゐないものが生ずるかを知らうとするのでは
なく、此の様な状態にある本質 A、B が一般に生じなければならぬかどうか、又それ
が反對のものから必然的に生じなければならぬものかどうかを知らんとしてゐ
るのである。此の點に關しては此の一般命題は無力である。なんとなれば、生き
てゐないもの—それが一般に生ずる時に—他の生きてゐないものから、又生きて
ゐるものは他の生きてゐるものから何故に生じ得ないかを説明してゐないから。

(三) 第三は經驗からのアナロギ—によつて生ずる問題である。吾々は生から死
への遷り行きを見るが、此からして生きてゐないものから生きてゐるものへの反
對の遷り行きを信じて、もよい筈ではないか、と言ふのであるが、只釣合のために、今
現に觀察してゐる一過程に他の過程を、その對照として加へんとする様なアナロ

ギーによつては他の過程の實在の證明がなされた事にはならぬ。而も此のアナ
 ギーを強化せんとして、此の反對の(死から生への)過程がなかつたとすれば、凡て
 の存在するものは、まもなく、一のカテゴリーに集中されて了ふとの考へを附加し
 てゐる。然し此の考へ方は凡ての存在が一カテゴリーに集る事が起り得ないか
 或は又許され得ないかと以前に確定されてゐてこそ證明力があるわけである。
 此の事は證明されてゐないし、又後に(六)述べる様に此の様な望まぬ結果の生ずる
 のはプラトンの假定からしては然し避けられない所である。

(四)第四に吾々は再び一般命題に立歸つて見る。反對のものはその對立反對の
 ものから生ずる、従つて存在せぬものは存在するものから、存在するものは存在せ
 ぬものから生ずると發展させても妨げない筈である。此の意味で然し魂の先在
 を説明する事は、又同じく魂の不滅をも否定する事になる。然し吾々は此れを次
 の様に考へてみよう。此の命題はそんなに一般的なものではなしに、只、今ある状
 態はその對立する状態の變更であると。そうすると然しどれが一體此處での主
 體であらねばならぬかと問題である。その主體を個々の魂自身だと考へて見よ

う。さすれば魂の不変な實體的存在を假定してゐるのであつて、その生とか死とかは只變化の形式に過ぎない。プラトンの言ふ *tebéis* (*tebéis*) は實は全々生きてゐないものを言ふのでなくして、暫く何等精神的な生き方をしてゐない事を言つてゐる様にみえる。彼がバイドン篇七二Aに *διερχομαι τὰς τῶν τεβείτων ψυχὰς εὐαί*
τρου, ὄβει ἐν πάλιν γέγονται, (死んでゐるものゝ魂は必然どこかにあつて、其處から再生する。)と言つてゐるのは明に魂は魂的ならざる存在に移るのでなくして、つゞいて尙魂的な存在で他の場所に移る事を言ひ表してゐるのである。

(五)第五に變化する魂の不變なる主體は何んであるかを尋ねてみよう。プラトンは生々死々の絶へざる變化を只二大形式で言ひ表はしてゐる。而もなんら強固な基礎をもつてゐない。然し生は死から、死は生から生ずると言ふ事は正しいとしても、死んでゐたものゝ更甦アナレオステスタイに於て、以前の、その死前にあつたものと同じものとして蘇生すると言ふ點には吾々は同意しかねる。即ち此れは獨特の不滅證明には何等役立つてゐない、高々、一般的に世の成行を見るに、生と死とは不變に交代してゐると主張してゐるに過ぎない。

1) *Psychologischer Beweis*

(六)第六に最後として、生きてゐるものからして死んでゐるものが生じて、死んでゐるものから生きてゐるものが生じないとすると、まもなく凡てのものが皆死んでをらねばなるまいとの議論に關してとある。然しプラトンがかくの如くにして魂が人間の肉體にその生を得る事がなくなるのを心配するは矛盾である。なんとすればプラトンは他の場所で、かゝる立場に立つ事を物語つてゐるから。即ち純善の魂と、純惡の魂とはその中間の魂とは別に——永久に肉體を得づして自分に適した滯在地に逗留する。此の二種の魂は時と共にその數を増して、そしていつかは凡ての魂は神聖なる場所にか邪惡なる場所にかかたまつて了ふのであつて、かくて肉體に生を得るためにもち出される魂はなくなるわけであらう。

(c) *Psychologischer Beweis.*

此れは經驗的な證明方法で、有名な想起説アナムネーシスを以て示されてゐる。學ぶと言ふ事は凡て自分自からの思ひ起しである。¹⁾人が何事かについて正しく質問される場合に、質問された人が正しく答へる事が出來、又その質問された事柄に關係したも

のを以前に學んでゐなくとも、その正しきものを見出す事が出来るのであるが、此の事は想起によつてのみ説明し得られる。人が何事かを聞き又は見た場合に彼は又同時に之によつて、今現に見聞する以外の他の領域にあるものをも見且つ聞くのである。³⁾「等」「不等」は此の想起を常に證明する二要素である。⁴⁾二つのものを比較して、此等は似てゐるか、或は似てゐないかと質問するが此際吾々は肉眼をもつては抽象的な「等」「似」、或はその反對の「不等」「非似」を見はしない。而も吾々は此等を見ないのに此等の概念を常に前提にし、使用してゐる。⁵⁾此の事實は想起によつてのみ説明される。AはBに似んと努めてゐる、AはBには似てゐないんだ。と吾々が判断するときには吾々は必然似んとするAも、似られんとするBも二つとも知つてゐなければならぬ。⁶⁾例へば、目の前の或るものが美そのものに似んと努める、即ち美ならんとの要求をもつたときには、吾々は美のアイデアに與らんとするもののみを見てゐるのである。此の事は正のアイデア等のアイデアに於ても同様である。而も吾々は此れに對して、美になれるとか、美になれぬとかの判断をする。此の判断をする事は、吾々がかつてかの美のアイデアを見てゐなければならず、且又

判断の瞬間にそのイデアを想起によつて再び思ひ浮べなければ出来ぬ事である。吾々が五官に依つて知覺する時には常に一般概念を假定してゐる⁸⁾。例へば吾々が二つの等しいものを見、それ等を等しいと認める時には同時に「等自身」を共に見てゐなければならぬ⁹⁾。二つのものは此のイデアに關與して初めて等しいのである。然るに吾々は生れて後に聞き、又は見るのであるから、従つて此の一般概念は既に出生の時には吾々の内にあつたのである¹⁰⁾。かくて此れは出生前にも早既に魂の内にあつたのでなければならぬ¹¹⁾。だからして、魂は既に、必然肉體の出生以前に存在してゐなければならぬ¹²⁾。

- 1) Menon 81 D. 98 A. Phaed. 72 E. ἡ μάθησις ἀδιμήνητος ἐστίν. 2) Menon 82 C. Phaed. 73 A. 3) Phaed. 73 C.
 4) ibid. 74 A. 5) ibid. 74 A E F. 6) ibid. 74. 7) Menon 81 c. Phaed. 74 A. 8) Phaed. 75 B. 9) ibid. 75 B.
 10) ibid. 75 C. 11) ibid. 72 E. 75 C. Phaedr. 249 E E F. 12) Menon 85. 86. Phaed. 76 C. 77 A. 92 D. 95 C.
 Gesetz 966 D. 967 D.

(d) 此の證明のアポリヤ

(一) 此の説明にも又アポリヤが伴ふ。第一に、出生前の魂がそんなに洞見に富んでゐるのに、その魂が出生後直ちにこんなに變化した性質をもつ事がどうして起

るのか。魂が此の純粹精神の狀態に近ければ近いだけ、純粹精神の痕跡が力強く現れねばならぬと吾々は考へなければならぬ。然るに此の點については吾々は正にその反對を経験する。人が若ければ若いだけ、即ち純粹理性の狀態に近ければ近いだけ、人は洞見を缺いてゐる。プラトンは此の事實を次の様に説明せんとした。魂はその完全性を自分と同種のものと共にある間だけ保有する事が出来る。殊に魂は精神的なものとして、精神的ならざるもの、物質、或は此等から生ずるもの等に近づけばその完全性を害ふのである。¹⁾ 所が魂は出生の際に肉體を伴ふ、そして或る時期迄は肉體が大きい影響をもち、最大な力を働かす。²⁾ この時には物質的なものが最も速かに成長し、發育して、精神的なものより優位に立つ様に強制するために偉大な活動力を示すのである。かくて魂は自分の唯一の眞の故郷から離れて牢獄に入込み、³⁾ 人を無感覺ならしめる眩惑が魂を把んで大きな變化を起さす。魂はだまされて、⁴⁾ 以前には判然と凡てのものを眞の姿に於て感覺し得た感官はその精確さを奪はれて了ふ。出生と共に果なき病が始るのであつて、此の病は死して始めて完全に再び醫されるのである。⁵⁾ 勿論此の病には以前幾度もかゝ

つてゐる。然し歳をとるに従つて肉體の發育の力が弱り、漸次、力弱き魂が恢復し、⁶⁾魂は想起の助をかりて再び魂が研究し且つ得んとしてゐる崇高なる知的世界を出來るだけ完全に自からに作り出す。⁸⁾此の完成は然し、完全な意味に於ては、魂が肉體の桎梏から脱して初めて得られるものである。⁹⁾即ちイデアールな存在の自由な天國に於て、何ものにも妨げられる事なき生活に於て初めて得られる。然し此の目的に多少なりとも近附く事は既に此の地上の生活に於ても可能である。緩かではあるが日常の事物についての意識は漸次向上して、不變な、永遠に眞なるもの、直觀に高まるのである。此の直觀は老境に入つて最高となる。¹⁰⁾なんとすれば日常の事物は幾度か經驗する事によつてその力を損ひ、力強くなつてゐる魂には以前の様な力をもつては對立し得なくなるから。

1) Staat 402 E. 485 E. Gesetz 727 C. 2) Tim. 44. Gesetz 715 D.

3) Phaed. 82 E. Phaedr. 250 C. Staat 514 D.F. 4) Phaedr. 248. 250 E. Staat 519 A. Phaed. 65 A. 82 C.

5) Gesetz. 828 E. 6) Tim. 44 B. 7) Tim. 44. 8) Phaed. 75 E. 9) Phaed. 66 C. Crat. 403 E.

10) Phaed. 70 A. 77 B.

(二) かくして第二に吾々は如何なる方法で、かのよりよき前生に於けるイデアの

洞見が行われるかを尋ねよう。イデアは *εἰς ἑαυτὴν* に存立するもので、純粹に精神的な眼のみがそれを *für sich* にあるがまゝに見得るのであつて、イデアが關與してゐる個々物に現れてゐる姿で見るとではない。では何故に此の洞見の可能性はかの前生に於ける魂にのみあつて、現世に於ける此の直接の魂にはないのか、と言ふに前生の魂は純粹に精神的なものであるが、此れが肉體と結合して此の純粹性を損ずるからである。然しイデアは個々のものゝ外にある事は出來ないのであつて、個々のものの存在又は現實中にある。従つてイデアは魂を離れて經驗——此の内にこそイデアは現れる——以前にはあり得ないのであつて、此の經驗の機會に際してのみ吾々の内に (*in uns*) 發展する。

一) イデア論については哲學第八輯拙稿参照。

(三) 更に第三に想起を、幾何學を知らぬ子供^{パイス}がかゝる専門的な質問に正しい答を出す事が出來るとの例證から説明してゐるが、此には吾々は次の様な事を考へて見なければならぬ。此の幾何學の質問は質問される子供にとつては幾何學の問題ではなくして、只算術の一般知識や、或は一寸した練習が必要な程度に質問され

てはゐないか。此の質問を見るに算術の知識を應用する事によつて答へ得られる様に見えるはしないか。子供が三の二倍は六なる事を知つてゐれば、三呎の二倍は六呎なる事を知り得る筈ではないか。

人間の精神的弱さを、出生するや間もなく魂をたぶらかす物材の有害な影響に歸せしめてゐるが、プラトン自身は自分の此の證明を強制的に正しいものと考へさせようとしてゐない。その事は彼の他の多くの表現や、比喩的な話方でわかる。

1) Memo. 82 B—85 C.

(四)よし此の證明が正しいものであるとしても、それは許されぬ難題ではあるが、此れでは充分魂の不滅は證明されたとは言へない。魂は死後も尙存続するかどうか、との問題が起る。吾々は此については先づその否定の方を推量するであらう。何んとなれば、魂は肉體に瞞され、弱らされ、魂の神性は或る程度にうばはれてゐるから。では肉體の死後魂の滅亡を何が妨げるのであろうか。此は次に研究すべき問題である。

(二) 魂の存続證明

(a) Ontologischer Beweis.

結合されたものは分散し、飛散するが、¹⁾之に反して結合されぬものは分散も、飛散もしない。一體魂は此の内のどのカテゴリーに屬するか。少しも變化する事なく、常に等しくある本質は必然單一である。²⁾個々のものの存在の根源として、そのもの、根柢にある理想的に本質的なものは常に變化なく、同じ状態にある、即ち「等自體」、「美自體」、「善自體」、「義自體」等は少しの變化も許されぬ。それ故此等は必然存続してゐなければならぬ。之に反して吾々の常に見る凡てのものは絶へまなき流の内にある。此等のものは自分に反對するものに對立する状態にある。⁴⁾此の變化する所のものは吾々が見、聞き、握る等一般に肉體の器官に依つて知覺し得る。⁵⁾之に反して前者は只魂の理性的反省の働に依つてのみ知り得る。⁶⁾かくて二種の本質が存在する、一は可視的であり、他は不可視的である。⁷⁾不可視的なものは常に見へない状態にある。⁸⁾さて魂は明に不可視的なものに似、又それと同質である。

魂はどんな人間の眼からも見られない。⁹⁾ 物質的なものはこれとは反対で、魂が物質的なものを通じて働く時には、その本来の範囲から離れて、誤謬を冒し、狼狽し、酔はされ、常規を逸する。¹⁰⁾ 然し魂が出来るだけ自分自身に關係し、或は自分と同質なもの、常に變らざるもの、純粹なものに關係してゐる場合には、そこに魂は安慰を見出し、¹¹⁾ 且つ又不變な存在に關係して、自からも又變化しない。¹²⁾ こゝから次の事が明になる。即ち魂は常に同一なるものに似、且つそれと同質であり、従つて又常に同一なるものと等しく自から單一である。¹³⁾ 魂と肉體とが結合された場合には、疑もなく、支配の力は魂に屬する。¹⁴⁾ 之に反して肉體は服従する立場にある、恰も常に同一なる神的なものが支配し、常に變化し、分散する物質的なものが服従する様に。¹⁶⁾ かくて魂はより強く、常に同一なるものに似てをり、遙かに肉體に優つてゐる。¹⁷⁾ 又肉體は多姿で、分散するものに似てをり、且つそれと同質であるから、魂は肉體に打克つのである。¹⁸⁾ 而して肉體は分散し、死滅するものに屬する。¹⁹⁾ 此の肉體も可成長く死後に保たれるのであるが、魂は之よりも長生する。此等からして魂は爾後不變なる事が結果する。²⁰⁾

- 1) Phaed. 78 C. 2) ibid. 78 C. Staat 380 3) Phaed. 78 D. 4) ibid. 78 E. 5) ibid. 79 A.
- 6) ibid. 79 A. Tim. 27. 7) Tim. 28. 38. Soph. 247 C. Phaed. 65 D. 79 A.
- 8) Phaed. 79 A. 9) ibid. 79 B. Tim. 46 D. 37 A. 10) Phaed. 66. 11) ibid. 79 D. 12) ibid. 79 D.
- 13) Staat 611 B. Phaed. 79 C. 14) Staat 517 E. 590 D. Gese. 803 A. 875 C. Phaed 80 A.
- 15) Phaed. 80 A. Xen. Mem. IV. 3. 16) Phaed. 80 A. 17) Phaed. 80. 87. Staat 585 B.
- 18) Tim. 38 A. Staat 497 C. 19) Phaed. 80 B. 20) Phaed. 80 D.

(b) 此の證明のアポリヤ

(一) 此の説明で吾々は先づ第一に魂が單一であるとの理論附けの缺けてゐるのに氣付く。プラトンは以前に魂の三分法¹⁾を幾度か言つてゐる。彼はバイドロス篇二四六以下で情慾、慾望の能力は魂が肉體に宿る以前にもある事を明にしてゐる。勿論、彼は認識能力に種々の優位を與へ、それを不滅なものとしてゐる。此の兩理論は相矛盾してゐる、なれば彼は根本に於ては死後に二種の他の能力を存立せしめてゐるから。認識能力は只認識し得るのみで喜びや、悲みには無感覺である。従つて喜びや、悲しみが、プラトンの考へた様に、もし生ずるとすると必然、魂の第二の能力が尙續くと考へなければならぬ。更に又矯正し得べき惡の魂

に、肉體を結合してから後に或る性向を與へるとすれば、その時又第三の能力が續くわけである。

1) a) *Νοητικὸν — πῶς καὶ ἐπιτελεῖται.*

b) *ὁμοειδὲς — ὁμοίω.*

c) *ἐπιτελεῖται — κατασκευάζεται.*

(二) 第二に魂の永遠性の理論を専らイデアの特殊な存在性にかゝらしめてゐる點を考へて見よう。イデアの特異な存在が維持し難いものとなれば、勿論此の上のうち建てられた魂不滅の意味も、妥當性も失はれて了ふのである。よし此が許されたとしてもイデアの永遠性がそのまま個々の魂にあてはまるものではない。イデアは常に妥當する所の真理である。真理としてのイデアの一つ一つは只一度そこにあるのである。而して魂はイデアではなく、イデアに關與する最終の本質である。さればプラトンがイデアに屬せしめた屬性を、無造作に魂に彼は與へ得ない筈である。

(三) 第三に此の理論に於ては、魂と肉體との相互關係や、相關作用を著しく誤認し

てゐるのに氣附く。即ち魂は無造作にあらゆる場合に支配的立場に立つてゐるとするが、尙實際には魂と肉體とは相關的に規定し、制約しあつてゐる。魂が無制限な主權だとすると、プラトンが大方の人間は悪いと言つてゐる事が理解出來ない。魂は善の原理であるからである。然るに惡は物質的なもの、優位又は勝利を常に假定してゐるから、此の場合には物質的なものが魂よりも明に力強くあるのである。

又魂が常に同じであり、同一状態を保つものとする、理論的には種々の智識や直觀によつて、魂を富ますと言ふ事は考へられないし、又惡から善へ、善から惡への變遷もない筈である。なんとなれば、かゝる場合には魂は他のものに變り、必然的に多少なりとも變化を受けるから。

(四) プラトンは自から自分の説に二つの反對をしてゐる。(シミアスとケペスの名に於て。) その一は魂は肉體の死後になくなる、なんとなれば魂は琴の諧音或は調和一般と多くの類似性をもつてゐるから¹⁾。諧調された琴に於ては調和は不可視的な或るものであり、美なるものであり、神的なものである。²⁾ 絃は然し物質的な

ものであり、結合されたもの、變化するものと同質である。さて琴はこはされ、絃が切られた場合に調和が尙存續し得るであらうか。かくの如く琴、その他の樂器の彈奏にも似たる人間の肉體に於ける魂が、物的な材料とその交互作用の適度な混合の産物としての調和以外の何ものでもない場合に、肉體が病氣や、その他の災害に依つて均整を缺いた時に、又琴の如くにこはされた時には、魂は、よしそれが完く優れたものとしても、琴の調和の様に同時になくなり、之に反して肉體は尙、燒かれるか腐敗するか迄はかなり長く殘留してゐる。³⁾

1) Phaed. 85 D. 92 D. Zeno (Diog. L. IX, 28.) Parmenides (Arist. Met. IV. 5)

2) Phaed. 86 A. 3) *ibid.* 86.

(五)此のアポリヤに對してプラトンは次の如く答へてゐる。彼は以前の命題をもち出して、對立してゐるものはその反對から生ずる。又想起を尙固執して、魂は生前に既に存在してゐると主張する。然し魂が調和であるならば、調和は、それが合成される以前に成立してゐなければならぬ。¹⁾此の事が、例へば、琴の場合にはどうしてあり得るか？かゝる器具の調和とか、諧音とか、かゝる器具そのものがそ

こにある以前にあり得るか？一方魂は肉體以前にありとし、他方魂は調和であると主張するは明に矛盾である。⁰²⁾ どうして合成或は綜合が、合成或は綜合される部分以前に成立し得るか？調和は實に最後に成立し、又最初に再び消滅する。⁰³⁾ 音樂の調和にはより良き、或はより少き調和と言ひ得るが、魂についてはそれは言へない。魂はそれが調和であれば常に同一程度に調和である、なんとなれば魂が他の魂よりもより高い程度にあるとはどんな魂についても言ひ得ないから。⁰⁴⁾ 然し吾々はよき魂、惡しき魂のある事を認める。⁰⁵⁾ そうして惡しき魂も調和として考へるから調和に差異を作らねばならぬ。⁰⁶⁾ そうでなければ善、惡が同じものになる。又、綜合されたものはその要素に支配される。⁰⁷⁾ 綜合されたものは綜合されるもの(その要素)を支配しないで、反つて綜合されるもの(要素)に従順であらねばならぬ。音樂の調和は弦の緊張、弛緩、絶へなき加減に従ふ。そして一寸した變化も自からは起し得ない。然るに魂は支配するものであり、肉體は明かに服従するものである。⁰⁸⁾ 魂が肉體より優位にあるは人の常に見る所であり、萬人等しく此を認める。例へば、ホメロスが

胸を打ちつゝ、心を咎めて言へらく

心よ忍べ、汝はより甚しきに耐へぬ。⁹⁾

と言つてゐるのはホメロスも亦魂は感覺的なものに對立し、感覺的なものを支配し得ると考へたのである。魂を單なる調和である¹⁰⁾と考へるのは正しくない。と言ふのは此處では希望を問題にしてゐるのではない、不可不¹¹⁾を問題としてゐるから。魂が物質的なものを支配し、又常に調和を固持してゐる此の事實は魂が單なる調和でない事を強く示してゐる。

此の魂は調和であるとの命題への反駁は魂の不滅證明に對しては何等の貢獻もしてゐない。然しプラトンの言ふ *sophrosia* について考ふべき事がある。彼は調和を二様に考へてゐる。即ち、(一)關係一般を示してゐる。その形式は變化的でも、不變化的でもあり得る。(二)美學的に快適な關係である。魂は調和であるとの見解は自然に第一の定義から出て來てゐる。それ故に首尾一貫してゐる。然しプラトンは第二の定義を頭に置いてゐたが故に困難が起きたのである。

1) Phaed. 92 B. 2) *ibid.* 92. 3) Phaed. 92 C. 4) *ibid.* 93 B. 5) *ibid.* 93 B. 6) *ibid.* 93 C.

7) *ibid.* 92 E. 94 C. 8) *ibid.* 94 B. *Tim.* 34 E. 41 C. *Staat* 353 D.

9) *Phaed.* 94 D. (*Hom. Odys.* 20, 17) 菊池譯 10) *Wollen oder Nichtwollen.*

11) *Müssen oder Nichtmüssen.*

(六) 第二のアポリヤはプラトン自身が持出してゐるが、それは次の様である。肉體の相互作用が止んだのも魂は調和の如くに直ちになくならぬとしても、漸次になくなる事は可能ではないか？魂が肉體よりもより力強い、又より永続的な或物としても、例へば、織匠が生きてゐる證據として、彼の織つた衣服を見せる様なものではないか¹⁾？この様に多くの肉體を魂が度々の出生に際して消耗し、魂は常にこの消耗される肉體を織り續け、而して最後の肉體を遺して消滅するのではないか。従つて魂は肉體よりもより永生的のものである事は承認されるも、不滅である事は承認されはしない。²⁾

1) *Phaed.* 87 B. 以下 2) *ibid.* 88 A. 91 D. 95 D.

(七) プラトンは此のアポリヤに次の如く答へてゐる。魂が消滅するものとする、その消滅するには充分な理由があらねばならぬ。一體何が魂を消滅せしめ得

るか？凡てのものには善きものと悪きものとがある。善きものは保存されるもの、永續するものであり、悪きものは破壊されるもの、滅却するものである。¹⁾例へば鐵には錆、木には腐蝕がそれで、あらゆるものにはそのものに固有の悪がある。そしてかゝる悪の襲ふ時には破壊が生ずる。此の固有の悪がそのものを滅却しないとする、他の何物もそれを滅せしめ得ない、なるとなれば善は勿論それ等を滅せしめ得ないし、又善にも悪にもあらざるものもそれを滅せしめ得ないから。²⁾然し魂を悪くするもの、例へば不正、無知と言つた様な多くのものがある。³⁾魂には不正、無知、或は魂に固有な他の悪が、その魂を滅して了ふ事なしに内在し得る。⁴⁾魂が、然し、その固有の悪に依つて滅しないとすると、まして魂は外的な或る悪に依つて外から滅せられる事はない。⁵⁾かくて魂は肉體の悪に依つては滅せられない、なんととなれば、ものは凡て他のものゝ悪に依つては滅せられないから。⁶⁾されば、肉體が病氣に罹り、木葉微塵に切り刻まれたとしても魂は何等の悪を受けない。⁷⁾従つて、魂が自分固有の悪に依つても、又外からの悪に依つても滅せられないとすれば、それは必然、常に永續するものであり、不滅なものでなければならぬ。

此れが第二のアポリヤに對するプラトンの答であるが、然し此れはあまり重要な意義をもつてゐるとは言へぬ。高々次の事を示してゐるに過ぎない。魂が一つの自分自からに存立する存在であると思はれると、吾々は魂を破壊する様な力を推測する事が出来ない。然し此れでもつて、かゝる力がないと言ふ證明にはなつてゐない。之に反して、人々が魂の存在は有機的な肉體の成立に制約されてゐるとの考へから出發してゐるのに、此に對する反駁はほんの少ししかされてゐぬ。と言ふのは彼は滅亡の原因を求めようとせず、滅亡の原因を、魂の根據となる原因の廢止、又は魂を永續さす原因の廢止とか、停止とかに見出さんとしてゐるから、此れに對する積極的な反駁は魂の爾後の永續を明にする第二の證明となつてゐる。

1) Staat 608 E. 2) *ibid.* 609 A. B. 3) *ibid.* 609 C. 4) *ibid.* 609 D. 5) *ibid.* 609 E.

6) *ibid.* 610 A. 7) *ibid.* 610 B.

(c) Dialektischer oder Epistematischer Beweis.

(Beweis aus dem Begriff der Seele)

此の證明は全く認識論的辯證法的説明である。美自體、善自體、大自體、他のそう
 言つた様な自體が存在する。 *εἰπαὶ τὴ καλὸν αὐτὸ καθ' αὐτὸ καὶ ἀγαθὸν καὶ μέγα καὶ τὰλλα*
*ἢ αὐτὰ.*¹⁾ 他の或るものは此の美自體に關與して初めて美と言ふ賓辭をもつのであ
 る。 *εἰ τὴ εὐρω δὴλο καλόν, οὐδὲ εἰ ἐν δὴλο καλόν εἰπαὶ ἢ εὐρω μετέχει ἐκείνου τοῦ καλοῦ. καὶ ἢ αὐτὰ*
*δὴ οὐτως λέγεται.*²⁾ 美なるものは美によつてのみ美となるのである。 *τὸ καλὸν τὰ καλὰ*
ὑπερτα καλὰ. 凡てのものはそのイデアに關與して始めてそうなるのである。³⁾
 イデアに關與して其名が生ずる。⁴⁾ 關與する所のものはその反對のものに關與す
 る事を望まぬ。そしてその反對のものが近づけば自から逃れるか、消滅するかで
 ある。⁵⁾ まして關與する所のものが他の何物かになる事はない。大自體は決して
 小なるものにはならず、一般に反對のもの自體は決してその反對のものにはなら
 ぬ。⁶⁾ かのイデアがその反對に耐へないのみでなく、互に對立はしてゐないが、然し
 常にそれに對立したものを固持してゐる本質⁷⁾も又、その内に包含してゐるものに
 反對するものもの入るを許さぬ(雪は温の入るを許さぬ)その反對のものが近づけば
 消滅する(雪に温が近づけば雪は消へる)。⁸⁾ 奇數の概念をもつてゐる三は、自分に包

含してゐる奇數に對立してゐる偶數を取る以前に消滅する。⁹⁾ 三には偶數の概念は決して生じ得ない、と言ふのは三は偶數に對立してゐるのではないが、三は尙偶數に對立してゐるもの、即ち奇數を包含してゐるからである。恰も火は寒に對立してはゐないが、寒に對立してゐるもの、温を常に固持してゐるのと同斷である。¹⁰⁾

魂が肉體に入込んで初めて肉體は生きたものとなる。¹¹⁾ 魂は例外なしに自からに生を擔つてゐる。¹²⁾ 生に對立するものは死である。前述の説明からして、魂は常に己に内在してゐるものに對立するものゝ入るを許し得ないのである。¹³⁾ 従つて生なる賓辭をもつ魂には死は決して入込み得ない。死を受け入れぬものは必然不死であり、不滅である。¹⁴⁾ 従つて魂は死を受け入れぬものとして不死であり、魂が不死なるが故に又不滅であつて決して消滅しない。¹⁵⁾ *Ὅτι οὐδὲ ἐν τῷ ἀθάνατον καὶ ἀδιήθητον ποῦ ἐστίν, ἀλλὰ τὴ ψυχῇ ἢ, εἰ ἀθάνατος τυγχάνει οὕτως, καὶ ἀδιήθητος αὐτῇ;*

- 1) Phaed. 65 D. 75 C. 100 B. 102 B. Diog. L. III. 2) Phaed. 100 C. Symp. 211. Parm. 132 ET
3) Phaed. 100 E. 101. 4) Phaed. 102 B. Arist. Met. L. 6. Diog. L. III. 13. 5) Phaed. 102 D. E.
6) *ibid.* 102 E. 103 A. C. 7) *ibid.* 103 C ET 8) *ibid.* 104. 9) *ibid.* 104. 10) *ibid.* 104 D. E.
11) *ibid.* 105 C. 12) Staat. 353 D. 445 A. Crat. 379 E. Gesetz 895 C. Phaed. 105 C.

13) Phaed. 105 D. Gesetz 893. 14) Phaed. 105 D. 15) Phaed. 106 B.D.E.

(d) 此の證明のアポリヤ

(一) イデア論に根ざした此の證明にも又多くのアポリヤが生じる。就中、その推理が正しくなされてゐない點である。プラトンは或るイデアに關與したるものはその反對のものを受入れ得ないと主張するが、その反對のものゝ近づく可能性を否定してゐない。此の場合、即ち反對のものが近づいた場合には、その反對のイデアに關與したるものはその場所をゆづり消滅すると言つてゐる。例へば、三は一を加へる事に依つて偶數になる事が出来る。三の性質は此の變化を防ぐ力はない。勿論此の場合三は自分の奇數の性質を失つて消滅してゐる。此のアナロギーから魂を論ずると彼は魂に包含されてゐるものに反對してゐるもの一般を受け入れる事は出来ぬとは主張し得ないで、只反對してゐるものが入込んで來た場合には魂は消滅しなければならぬと主張し得るのみである。されば魂は生なる賓辭を死が闖入する迄の間だけ有する、或は魂が生あるものとして存在する間だけ、同一律の論理法則に依つて、魂は生なきものではあり得ないのである。どれ

だけの間、魂が生あるものとして存在するかは全く此の場合證明されずに残されてゐる。此の様な演繹でもつてプラトンは不滅よりも寧ろ魂の可死性を證明してゐる。しかも此の證明は生と死とは同一本質の交互的な状態であると言ふ以前の主張と一致しない。之に加ふるに此の證明は魂の先在證明に對する第一の缺點と同じ缺點をもつてゐる。即ち、不滅性は此の場合、人間の魂のみの特權ではなくして、動物のそれにも同様であらねばならぬ。何んとなれば動物の魂にも人間のそれと同様に生の一般的賓辭が相應してゐるから。

動物の魂の不滅を斯様なものとして證明する研究の證據を吾々はプラトンのいづれもの著書に於ても見出し得ない。反つて反對にプラトンは人間の魂と動物の魂との間に廣く且つ深い溝壑を置いて、人間の魂のみが獨り眞に神的なものであり、理想的な超感覺的、永久的世界を認識する可能性をもつてゐるとしてゐる。プラトンは魂の不滅證明に於ては常に人間の魂のみを考へてゐた。されば動物の魂の不滅性が、此の數多き證明中の或る證明中に自から含まれてゐたとなると、それはプラトン特有の深き意向とは一致しない事にならう。プラトンは後に間

もなく動物の魂にも言及して、人間の魂の認識能力のみを不死なるものと見做し、動物の魂は然し、此れを缺く故不死ではないと見てゐる。プラトンは繰り返し繰り返して不滅性を動物の魂から遂ひ拂つてゐる¹⁾。此の事を、然し前述の證明が要求するのは必然の結果であると言はねばならぬ。かくて此の反駁からして既に此の證明の妥當性の狭い事を知る事が出来る。勿論吾々はプラトンが魂の輪廻を認めて人間の魂が動物の内にあつて、それが不死である事を認めてゐると言ふ事は出来る。プラトンによれば凡ての動物には人間の魂が輪廻して入り込むし、又動物の魂も人間のそれと同様に本源的に又獨自に、*für sich*に作られもする。此の様にその見る見方には測らざる混亂が生じ、その理論は再び決定的な汎神論的性格を帯びて以前の自然哲學の見方―即ち同じ神的なヌースが或るものにはより多く、他のものにはより少く、凡てのものに行渡つてゐる見方に比して何等の進歩をも示してゐない。かくの如くして此の證明は魂の存續證明の第一のそれに似てゐる。

1) Tim. 69 C. Statism. 309 C. Epin. 992 B.

(c') Beweis

プラトンによれば魂は自から活動する本質である¹⁾。他のものによつて動かされ、又他を動かし得るものは變化するものである。そして動かされる事がなくなつた時には、その生命も又なくなる²⁾。自分自からに動くものは動く事が止る理由がない。そして他のものにとつては運動の初となる³⁾。此の初めは決して作られもしないし、又従つてなくなりもしない⁴⁾。自分自からに動くものは他のものに對して運動の初であり、源泉である。然し自分自からに動くものは少して休止する事は出来ぬ。そうでなければ全宇宙や凡ての動かされるものは静止して了はねばならぬし、そうして再び動く事が出来ぬ。なんとなれば、運動の衝動を外から受ける凡てのものには運動の源が缺けてゐるから。此の様な衝動を自からの内にもつてゐるものが此等のものを活動づけるのである。魂の本質は此の後のものにも屬する。魂がかくの如く自分自から動くものであるとすれば、魂は時間に制約されず、永久であり、不滅であらねばならぬ。 *ἐξ αὐτοῦ καὶ ἀθάνατον οὐκ ἔχει*

- 1) Phaedr. 245 E. Gesetze 895—896. Epin. 988 D. 2) Phaedr. 245 C. 3) Phaedr. 245 D.
 4) *ibid.* 245 D. 5) *ibid.* 245 E.

(d) この澄明のアポリヤ

此の澄明の無意味な事はたやすく見得られる所である。一般に「自からに動くもの」*τὸ αὐτὸ αὐτὸ κινῶν. τὸ αὐτὸ αὐτὸ κινῶν* が眞に考へ得られる魂の概念、或は屬性であらうか。吾々は此の問題の説明をプラトンの他の著書で見つみるに、吾々は直に著しき反對に出逢ふ。プラトンは此の個所以外では凡ての著作を通じて、神とイデアとをのみ永久的なもので、時間に制約されぬものとしてゐる。しかも實にプラトンは明に魂の創造を主張してゐる。そして魂の創造の後に天體が作られたとなしてゐる。魂には運動への衝動は外部から、即ち神から來たる。神以外の他の何者も「自からに動く」と言ふ賓辭は與へられない。従つて「絶對」「無制約」とかの賓辭も與へられない。然るにプラトンは此處で魂は無制約的と言ふ賓辭をもつた本質と言つてゐる。此の事は魂を人間に於ては絶對的な支配者であるとなす法外な理解がプラトンの念頭に浮んでゐたからであらう。

(三) 結 論

以上に渡つて全部の不滅証明を見るに前述の如く、その一つ一つに幾多のアポリヤをもつてゐる。プラトンが証明したその反對すらも又證明される有様であるが、プラトンは魂の不滅を確く信じて、多くの對話篇にその確信を言ひ表してゐる。此れはプラトンの理論的、倫理的、宗教的考へ方にとつて魂の不滅が必要缺くべからざるものであつたからである。又プラトンはソクラテスの眞の後継者であるが、ソクラテスは彼の道德的意識や、目的論的原理の承認が世界秩序に於ては必要なものと考へたのであつて、魂は物質的なものとは全く異なるものであり、自存的なものであり、神と同質のものであると考へ、その結果死後の魂の平靜、獨存、その方法、様式をそれ〴〵地上生活を顧慮して嚴格に規定して、此れを事實と考へた。此の事が原因してプラトンの理論的原理が少くとも本來の證明法を許さなかつた。プラトンのなした證明が妥當し、又説得力のあるものであるか否かは、今迄に

吾々は見て來たのであるが、然し、一般にプラトンによればイデア、—超感覺的眞理たる理想的なもののみが永續的で、不變であるのであつて、魂はイデアではなく、イデアに關與する個物であるとする此の形式に立つイデア論に立つ限りには不滅に對して何等の證明も考へられない。プラトンは個々の現實ワイルクリッヒカイトがイデアに對する關係を全く曖昧にしてゐるのであつて、吾々は彼の言ふ *metexen* とか *luminos* とかの意味を理解するに苦しんでゐる。イデアは原型で個物はそれに關與すると、の主張にも眞の内容を理解し難い。一體超越的な原型へ關與するとか、模寫するとかはどうしてなされるかと言ふにプラトンは此れに何等はつきりした解答を與へてゐない。關與の様式、方法、原因等を知るために吾々はイデア以外に尙他のより高次の原理を助けにもつて來なければならぬ。なんとすれば、第三の働くものなくしてはイデアと個物との此の様な可能性を見出しかねるから。¹⁾

これを要する不滅證明が個々の魂に向けられてゐるとすれば、その證明は凡て完全なものと言ふ事は出來ない。²⁾ かくて吾々はプラトンの言ふ所の魂とは一體如何なるものであるかを研究すべき立場に立つ。

1) 哲學第八輯拙稿參照。

2) Hartmann N., Platons Logik des Seins. Giessen 1909. S. 297.
Teichmüller G., Die Platonische Frage. Gotha. 1876, S. 3.